

講演記録「中島飛行機から富士重工（スバルへ）」

講師：太田情報商科専門学校 校長 若林宏宗 先生

I はじめに

講師の若林先生は、お仕事が大変お忙しい時期にもかかわらず、私たち地理部会員に対するご講演を引き受けていただいた。

II 講演内容

1 中島知久平による中島飛行機の創立

(1) 飛行機制作事業の開始（大空への夢）

中島知久平は新田郡押切村(現尾島町)の農家に生まれ、数学が優秀であった。知久平は農家を手伝いながらも軍人となる志を抱き、父の反対を押し切り十八歳で上京した。苦学の末、海軍機関学校に入学し、三番以内で卒業した。入学時は何十番であったことから知久平が努力家であったことがうかがえる。

知久平は海軍に入りながら飛行機に興味をもち、ライト兄弟の動力飛行機初飛行に刺激され、米国にて飛行士免許を海軍ながら所得した。そして日本海軍最初の飛行機を制作するに至った。

しかし、当時の海軍は飛行機を重要視しなかった。そのため知久平は民間で飛行機制作を始めるため海軍を去った(※戦力分析でも船よりも飛行機の方が強かった)。創業時のスタッフは六名であったが若手の優秀な専門家集団であった。

(2) 試作・試験飛行（苦難の飛行機づくり）

大正七年四月、名称を「中島飛行機製作所」と改称し、七月には試作機の第一号が完成したが、なかなか「飛ぶ飛行機」を造ることが出来なかった(大正の不景気時、景気もあがらなく「あがらないのは中島の飛行機」と揶揄されていた)。

必死に試行錯誤を重ね、大正八年二月に優秀な試作機(4型6号機)が見事、飛行に成功した。

(3) 経営基盤の確立と生産の増大（懸賞郵便飛行での優勝、東京への進出など）

「第一回懸賞郵便飛行競技」で優勝(東京～大阪で郵便物を運ぶ、三機出し、一機優勝。賞金2000万に加え賞品も凄かったそうである)するなど常に業界をリードする存在であった。日本初の金属飛行機を制作したことで、クルミや檜など大木の飛行機がなくなった。昭和の初めには名実ともに日本航空機業界の頂点に立った。ジュラルミン飛行機は昭和に入ってからのことである。

会社が大きくなるに従い、知久平は優れた経営手腕も発揮した。

2 中島飛行機の発展と軍需工場への移行

(1) 太田新工場の建設と昭和天皇の行幸

中島飛行機の機体は創業時から太田工場であった(発動機は新鋭の東京工場で生産)。機体増産のため太田新工場の建設を昭和九年に開始した。この年に天皇の中島飛行機太田工場への行幸があったため、主工場は突貫工事で完成させた。

(2) 施設の拡充と従業員の増加（小泉製作所の新設など）

太田新工場の全体の完成は昭和十一年であった。昭和八・九年からの増資の繰り返しと、日中戦争の拡大とともに、昭和十年代半ばまで各地に新工場を次々と建設した。施設の拡大とともに従業員も増加した。知久平は自分を省みず、かなり従業員を大切にしている人物であった。

(3) 第一軍需工場への移行（空襲化の生産）

中島飛行機は、国営の第一工場を経て終戦とともに解体された。

(4) 生産機種と機数

創業以来生産した飛行機・・・陸軍機 40 種、海軍機 65 種、民間機 21 種の合計 126 種。総生産機数 25,935 機。発動機も数々の名機を生産し、総生産基数は 46,726 基であった。

中でも中島飛行機の代表とされる一つが「九一式戦闘機」である。昭和六年十二月正式採用された陸軍機である。

他に凄い活躍を見せたのが「九七式戦闘機」である。低翼単葉・単座の陸軍機で十四年夏のノモンハン事件では、120 機で十倍余のソ連空軍と交戦し、実に 1252 機を撃墜破し、地上の敗戦を対等の和平に導いた。

そして「零式艦上戦闘機」いわゆる“ゼロ戦”がある(ただこれは他社機で中島も生産したものである)。真珠湾攻撃にも 108 機が参加した。米軍指揮官から“ゼロ戦に近づくな”と言われるほど優秀な飛行機であった。

3 中島知久平の政界進出

中島知久平は一方、昭和五年(1930)の衆議院選で初当選を果たす。その後、昭和二十年(1945)まで最高得点で四回連続当選し、十五年余中央政界で活躍した。

飛行機王から転身した中島知久平は、政治家としても突出していたようで、一年生議員から国会で大論戦を展開して活躍を始めた。その後、群馬県人として初めての大臣である鉄道大臣となり、昭和十四年には政友会第八代総裁となった。そして終戦直後の昭和二十年、軍需大臣や商工大臣となって終戦処理にあたった。

4 中島飛行機から富士重工業へ(太田市の基幹産業に)

(1) 太田大空襲

太田大空襲は、昭和 20 年 2 月 10 日、同 16 日、4 月 4 日、8 月 14 日、他 3 回あった。東京大空襲は 3

月 10 日である。アメリカからすると、東京をやる前に太田をやらなければならないと考えていたのである。

昭和 20 年(1945)2 月 10 日に太田本工場 B29、90 機の猛爆撃を受けた。

(2) 中島飛行機の解体⇒富士産業(株)⇒その他を 12 社に分割

昭和二十年(1945)4 月 1 日、中島飛行機工場国営に指定され第一軍需工場となったが、同年 8 月 17 日、第一軍需工場長官に対し軍需大臣から生産停止命令がくだった。同日、中島飛行機(株)を富士産業株式会社と改称し、昭和二十五年(1950)5 月 31 日、企業再建整備法による第二会社 12 社が発足した。

ただ、この間、昭和二十四年(1949)10 月 29 日、中島飛行機創業者・中島知久平は亡くなった。享年 65 歳であった。

(3) 富士産業(株)として自転車、スクーター生産の開始

富士産業は、月産 4,500 台、250 台ほどで活況に。

(4) 富士重工業(株)の設立と 5 社の吸収合併⇒「スバル(六連星)」の名称が誕生

昭和二十八年(1953)7 月 15 日に富士重工業株式会社が設立された。その後、資本出資 5 社を吸収合併した。この吸収した 5 社が六連星のうちの小さい 5 つ星である。

(5) 幻の名車「P1」。

プリンス、スカイラインは中島飛行機の直系である。

(6) 大衆車の傑作「スバル 360」

昭和三十二年(1958)3 月 5 日に軽四輪乗用車スバル 360 が発表され、同年 5 月 1 日発売された。当時発売価格は 41 万円であった。

購入者第一号は松下電器の松下幸之助である。ちなみに当時の大卒初任給は 12,000 円ほどだったそうである。これは私よりも少ない月給である(一概に比較することは出来ないが)。

昭和三十九年(1964)5月3日、鈴鹿サーキット第2回グランプリレースのT-1クラスでスバル 360 が 1位・2位を独占した。



スバル 360

(7) ポルシェにも影響を与えた「スバル 1000」

昭和四十年(1965)10月21日、小型乗用車スバル 1000 が発売された。その後、昭和四十二年(1967)5月15日には、スバル系シリーズは生産 50 万台を達成した。これは同一車種の最高記録樹立であった。



スバル 1000

(8) スバルが開発

スバルは他にも FF、4WD、四輪自動懸架、水平対向型エンジン、無段変速(CVT)など、様々な制作に関わった。

5 中島飛行機から派生・転換して発展した太田の戦後地場産業

- (1) 金型工業 (技術)
- (2) ボタン工業 (材料)
- (3) メリヤス工業 (労働力)

6 中島知久平と中島飛行機に関わる市内・近隣の各所に残るもの

- ① 太田製作所本館
- ② 太田製作所呑龍工場
- ③ 小泉製作所
- ④ 中島倶楽部 跡
- ⑤ 小泉製作所尾島工場
- ⑥ 太田飛行場
- ⑦ 中島(新)邸
- ⑧ 中島知久兵の墓
- ⑨ 中島知久平直筆の碑
- ⑩ 『中島知久平先生像』(胸像)
- ⑪ 『中島知久平の像 元内閣総理大臣 岸伸介』(立像)
- ⑫ 『雄飛 照賢書』(小碑)
- ⑬ 中島飛行機の木製プロペラ

III おわりに

中島知久平はじめ中島飛行機からの富士重工業に関する貴重なご講演をいただいた上、地球上の全七大陸を旅してなど資料も配布していただくことができた。我々地理部会員は、若林先生から直接ご講演いただき、大変有意義な時間を過ごすことができた。

中島知久平が群馬県ひいては日本全体に与えた影響、残した功績は大きく、これからも繋いでいかなければならないものであると感じた。それは一人の群馬人としてだけでなく、教員という立場であるからこそ後世に残していかなければならないことなのかもしれない。

最後に、大変お忙しい中、興味深く内容の濃い素晴らしいご講演をしていただいた若林先生に、心から感謝申し上げ、今後のご活躍を祈念するとともに、我々地理部会員はこの講演会で学んだことを活かしていきたいと考えている。

(記録 群馬県立前橋南高等学校 富井建太郎)